



海洋工事のスケール感にやりがい

日起建設株式会社 本店

山浦 圭滋 さん

やまうら けいじ

愛知県出身で現在50歳。地元の大学で建設工学を学び、県内に本社がある日起建設に就職した。以来、一貫して現場に従事している。

今は県内の民間工場の建設現場で、造成工事の主任技術者として携わるが、20代から30代にかけて海洋土木工事も経験。四日市港(三重県)、名古屋港(愛知県)、東京港(東京都)、仙台塩釜港(宮城県)での浚渫工事に関与してきた。

直近の海洋土木工事は国土交通省発注で2013年度に行われた「仙台塩釜港塩釜港区外港地区(-7.5m)浚渫工事」。2006年度、2008年度、そして2013年度と断続的に浚渫工事に携わりながら、働き盛りの30代の長い時間を同港で過ごした。

同港での浚渫作業時の思い出の一つに、戦時中の砲弾を海底から見つけたことがある。現場に一瞬緊張が走ったが、落ち着いて所定の連絡を取り、自衛隊にその処理をお願いした。地元のニュースでも大きく取り上げられたこともあり、強く印象に残っている。



バックホウ台船

現場最前線

海^{うみ}人^{ひと}

2013年度の浚渫は、船舶が行き交う狭い航路が対象だった。それだけに作業も慎重に行わなければならなかった。船舶が航行する際には、影響を及ぼさないよう作業をいったん止めて待避する。作業に当たって海上保安部と常に連絡を取って航行予定を確認するなど、作業調整が現場に従事する技術者としての大切な役割となる。

浚渫箇所の海底に大きな岩盤があった。そのため、バックホウ台船にブレーカーや硬土盤を積み込み、砕いて引き上げるという作業も伴った。「海底での作業は、想定通りに岩盤が砕けているか分からず、手探り状態で進めていった」と当時を振り返る。浚渫場所は民家が近くにあり、「近隣住民の方々や漁業協同組合の調整も欠かせない仕事だった」とも話す。

陸上工事とは異なる場面も多々ある海洋土木工事ではあるが、「圧倒的なスケールの大きさは陸上工事では味わえない」。船舶の安全な航行にも貢献できていると考え、達成感が大きく、やりがいも感じられる。

以降は、造成工事や道路工事など陸上部での工事を中心に経験を重ねている。その中でも海洋土木工事で地域住民や漁協とのコミュニケーションを通じて信頼関係を構築できたことなど、陸上工事を円滑に進める上でも生かせることが少なくないという。

すでに10年以上、海洋土木工事とは離れている。それでも「もう一度、海に戻って仕事をしたい」との思いは今も持ち続けている。

各地の現場に携わる中で、家族と離れた生活もだいぶ長くなってきた。そんな山浦さんが仕事以外で楽しみにしていることが二つある。その一つが食べ歩き。おいしそうなお店を見つけて食べに行くそうで、仙台塩釜港に赴任した際に味わった「牛タンは今も忘れられない」。もう一つが数年前から自宅で飼い始めたネコと遊ぶこと。休みに戻れる時には、家族とおいしいものを食べに行った後、ネコとじゃれ合う。そんな週末を過ごしなが、厳しい現場での仕事に向けた英気を養うのだという。